



2013 / 2014 シーズン
PLAY

演劇



新国立劇場

2013.1

Contents

演劇芸術監督 宮田慶子	2
2013/2014シーズン 演劇 ラインアップ	3
Try・Angle ―三人の演出家の視点― Vol.1	
OPUS / 作品 ■日本初演	4
Try・Angle ―三人の演出家の視点― Vol.2	
エドワード二世 ■新訳上演	8
[JAPAN MEETS… ―現代劇の系譜をひもとく―] VIII	
ピグマリオン ■新訳上演	12
Try・Angle ―三人の演出家の視点― Vol.3	
アルトナの幽閉者 ■新訳上演	16
マニラ瑞穂記	20
テンペスト	24
十九歳のジェイコブ ■新 作	28
永遠の一瞬 (仮題) ― Time Stands Still ― ■日本初演 ...	32
公演一覧 (1997.10 ～ 2013.7)	36

※消費税率の改定に伴い、2014 (平成26) 年4月1日以降、料金が変更になる場合があります。

2013/2014シーズン 演劇



演劇芸術監督
Artistic Director (Play)

宮田慶子
Miyata Keiko

それぞれの視点

2013/2014シーズンは、シリーズ企画「^{トライ}Try・^{アングル}Angle —三人の演出家の視点—」の第1弾、『OPUS / 作品』で幕をあけます。“挑戦”“視点の角度”そして“三人の演出家”という意味から名付けた「Try・Angle」シリーズは、今、最も充実した作品作りを重ねている、次代を担う期待の集まる三人の演出家（小川絵梨子、森新太郎、上村聡史）に、思う存分に力量を発揮してもらおうという企画です。

それぞれが選んだ戯曲は、テーマや時代、国や言語も異なる、野心に満ちたラインアップになりました。劇作家の生み出した世界に、どう切り込み、独自の視点と手法で作品世界を展開していくか……。三人の新たな挑戦は、同時に、“演出”という作業の本質を考え、その可能性を探る手がかりとなるに違いありません。

11月～12月には、おなじみの「JAPAN MEETS…」シリーズの第8弾として、英国の近代劇を代表する劇作家、バーナード・ショーが、新国立劇場にはじめて登場します。ミュージカル『マイ・フェア・レディ』の原作である『ピグマリオン』は、言葉の地域性や階級による違いを題材にした、諧謔性に溢れた作品です。

続いては、国家や土俗性をテーマに独自の劇世界を築いた秋元松代作品の『マニラ瑞穂記』を、栗山民也氏演出により、骨太な舞台に立ち上げます。『長い墓標の列』に引き続き、研修所修了生達の若い才能に期待が集まります。

そして6月には、2011年の『天守物語』で斬新な演出をみせた白井晃氏の演出による、シェイクスピア作『テンペスト』です。ロンドンオリンピック開会式の題材ともなった名作を、中劇場の舞台いっぱいに繰り広げます。

更に、血と地域性にこだわり、精力的に執筆を続けながらも、1992年に惜しまれつつこの世を去った作家、中上健次の小説『十九歳のジェイコブ』が、新作の舞台として、松井周氏の台本、松本雄吉氏の演出によってよみがえります。

シーズン最後を飾るのは、2009年にニューヨークで初演された『永遠の一瞬』の日本初演です。今なお世界各地で繰り返される戦争・紛争を巡り、それに外側から関わろうとする者達の情熱と挫折とジレンマを、等身大で考えさせられる作品です。

劇作、演出、翻訳などそれぞれの視点を通し、劇世界の未来に目を向けた道を探りながら、観客の皆様と共に歩む一年でありたいと思います。

〈プロフィール〉

1957年生まれ、東京都出身。新国立劇場演劇部門、芸術監督。

80年、劇団青年座（文芸部）に入団。83年青年座スタジオ公演『ひといきといき』の作・演出でデビュー。

翻訳劇、近代古典、ストレートプレイ、ミュージカル、商業演劇、小劇場と多方面にわたる作品を手がける一方、演劇教育や日本各地での演劇振興・交流に積極的に取り組んでいる。

新国立劇場演劇研修所講師・サポート委員。社団法人日本劇団協議会常務理事、日本演出者協会副理事長。

主な受賞歴に、94年第29回紀伊国屋演劇賞個人賞（『MOTHER』青年座）、97年第5回読売演劇大賞優秀演出家賞（『フユヒコ』青年座）、98年芸術選奨文部大臣新人賞（新国立劇場公演『ディア・ライアー』）、01年第43回毎日芸術賞千田是也賞、第9回読売演劇大賞最優秀演出家賞（『赤シャツ』『悔しい女』青年座、『サラ』松竹）など。

上記以外の主な演出作品に、『ブンナよ、木からおいてこい』『妻と社長と九ちゃん』『をんな善哉』（青年座）、『愛は謎の変奏曲』『恋の三重奏』『ガブリエル・シャネル』（松竹）、『ノイズゼオフ』『エレファントマン』『ペテン師と詐欺師』（ホリプロ）、『ふたたびの恋』『LOVE30』（パルコ）、『伝説の女優』（アトリエ・ダンカン）など。

新国立劇場では上記『ディア・ライアー』のほか、『かくて新年は』『美女で野獣』『屋上庭園』を演出。芸術監督就任後は2010/2011シーズン『ヘッダ・ガーブレル』『わが町』『おどくみ』、2011/2012シーズン『朱雀家の滅亡』『負傷者16人 — SIXTEEN WOUNDED —』、2012/2013シーズン『るつぼ』。

2013/2014シーズン 演劇 ラインアップ

〈計8演目〉

2013.9

Try・Angle —三人の演出家の視点— Vol.1

OPUS / 作品

作： マイケル・ホリンガー

翻訳：平川大作

演出：小川絵梨子

2013.10

Try・Angle —三人の演出家の視点— Vol.2

エドワード二世

作： クリストファー・マーロウ

翻訳：河合祥一郎

演出：森 新太郎

2013.11～12

[JAPAN MEETS... —現代劇の系譜をひもとく—] VIII

ピグマリオン

作： ジョージ・バーナード・ショー

翻訳：小田島恒志

演出：宮田慶子

2014.2～3

Try・Angle —三人の演出家の視点— Vol.3

アルトナの幽閉者

作： ジャン＝ポール・サルトル

翻訳：岩切正一郎

演出：上村聡史

2014.4

マニラ瑞穂記

作： 秋元松代

演出：栗山民也

2014.5～6

テンペスト

作： ウィリアム・シェイクスピア

翻訳：松岡和子

演出：白井 晃

2014.6

十九歳のジェイコブ

原作：中上健次

台本：松井 周

演出：松本雄吉

2014.7

永遠の一瞬 (仮題) — Time Stands Still —

作： ドナルド・マーグリーズ

翻訳：常田景子

演出：宮田慶子

OPUS / 作品

日本初演
Japan Premiere

Opus

小劇場

●前売開始：2013年6月23日(日)

●料金 A：5,250円 B：3,150円

作：マイケル・ホリンガー

翻訳：平川大作

演出：小川絵梨子

出演：段田安則 相島一之 加藤虎ノ介 伊勢佳世 近藤芳正

企画意図

2013/2014シーズンの幕開けを飾るのは、新進の演出家として、今演劇界の熱い視線を集める女性演出家・小川絵梨子による『OPUS / 作品』(オーパス)。「30代の演出家の現在の視点のあり方を、お客様とともに見つめたい」と宮田慶子芸術監督が企画したシリーズ第一弾として上演します。

06年にアメリカで初演された本作は、弦楽カルテットの4人の男性を中心に、人間の欲望や猜疑心、嫉妬や裏切りを、コミカルに描いた秀作です。

新国立劇場では『コペンハーゲン』の翻訳で高い評価を得た平川大作による新翻訳を、小川絵梨子の鋭い視線で演出、カルテットのリーダー、エリオット役として『温室』での名演技も記憶に新しい段田安則が出演するなど、注目度の高い作品です。

東京公演後には、水戸芸術館での公演を予定しています。

作品

弦楽四重奏団ラザラ・カルテットは、差し迫るホワイトハウスでの演奏会に向けて、急遽ヴィオラ奏者のオーディションを行っていた。そこで選ばれたのは、グレースという若き女性。もともとのメンバーだったドリアンは、その起伏の激しい性格から解雇されており、数週間前から忽然と姿を消していた。

カルテットのメンバー達は、ホワイトハウスでの演奏会に難曲であるベートーヴェンOpus 131を選曲。だがグレースには不慣れな曲だったため、カルテットは限られた時間内で出来る限りのリハーサルを行わなければならない。

Opus 131のリハーサルに励むグレースとエリオット、アラン、カールの4人。演奏ミスが多いエリオット。他の3人がそれを指摘するも、エリオットは決して自分のミスを認めようとはしない。ホワイトハウスでの演奏まで時間がない。4人のリハーサルは緊迫していく。

なんとか無事に演奏会が終わり、楽屋に戻った4人の前に突如としてドリアンが現れる。ドリアンはエリオットを解雇し、自分が第一ヴァイオリンとしてカルテットに戻り、アランとカール、グレースとともに新生ラザラ・カルテットを結成しようと持ちかける。

敗北感と激しい怒りを抱えその場を立ち去ろうとするエリオットに、ドリアンはグループ名にもあやかっただ、名器・ラザラのヴァイオリンを返すように要求。これは自分のものだと言主張するエリオットと、カルテットで使用する楽器はカルテットに所属するものだと言主張するドリアン。口論は、やがてアランやカールを巻き込んでいき……。

翻訳家からのメッセージ

平川大作

2009年、小川絵梨子さんが訳して演出なさった『Zoo Story』と、私が翻訳を担当した『TEA』という芝居とが二本立てだった折に下北沢の打ち上げの席で初めてご挨拶を交わし、その2年後に同時に翻訳戯曲賞を受賞したのが次のご縁。今回同じ作品に携わることができるのは、私にとってまさに念願かなった三度目の正直のご縁となります。とはいえ、翻訳と演出を自在にこなす小川さんに、他の翻訳担当が一体何をもって加勢できるのかと考えはじめると、ただ喜んでばかりもいられません。さて、どうしたら？　そういえば、経験豊かな弦楽四重奏団を描く今回の作品『OPUS／作品』で登場人物たちは、単独で脚光を浴びる独奏ではなく、合奏でしか得られない妙なる響きの至福を求めています。その芸術の自由さとのびやかさを愛しています。きっと芝居作りも同じはず。自分もまた今回の上演を豊かにする弦の一筋となることができればと考えています。

演出家からのメッセージ

小川絵梨子

『OPUS／作品』は、或るカルテット（四重奏楽団）についての物語。一時は脚光を浴びたものの、今は下り坂のカルテット。音楽家としての自負と不安、プライドと嫉妬、理想と現実。その狭間で揺れながら、芸術家として生き残っていくために、彼らは何を選択していくべきなのか。

これは、音楽を愛する男女が、自身の誇りと生き残りを賭けて葛藤する様を描いたシニカルなコメディです。

カルテットのメンバー達は互いに信頼と尊敬で結ばれています。しかし一方、プロフェッショナルとして情に流されない厳しさも必要とされる。個人では拮抗しながらも、カルテットとしては調和を保たなければならない。メンバー同士が繰り広げるパワーゲームは、どこか哀しく、どこか可笑しい。

人間関係の危ういバランスを緻密に軽妙に描きつつ、シビアさのあるコメディにしたいと考えています。一人で奏でる音よりも、四人で奏でる音楽を愛しながらも、不和と衝突は避けられない。個人と全体の調和の狭間で揺れる葛藤を、丁寧に鮮明に描きたいと思います。

OPUS / 作品

マイケル・ホリンガー

Michael Hollinger

1962年、米国ペンシルバニア州ランカスター生まれ。劇作家。ヴィラノヴァ大学芸術科学部准教授。84年、ヴィオラ奏者としてオーバーリン音楽学校で学士号を、89年ヴィラノヴァ大学芸術科学部演劇専攻で修士号を取得。『OPUS / 作品』以外の主な作品に『カフェ・ド・グラン・ブフの空のプレート』（94年）、『インコラブティブル』（96年）、『タイニーアイランド』（97年）、『レッド・ヘリング』（2000年）、『トゥース・アンド・クロウ』（04年）、『ゴースト・ライター』（10年）など。アメリカ劇評家協会賞、バリモア賞など数々の演劇賞も受賞している。



平川大作

Hirakawa Daisaku

1969年、愛知県犬山市生まれ。九州大学文学部、大阪大学大学院演劇学専攻で学び、「ひょうご舞台芸術」に調査研究員として参加。2000年より大手前大学に勤務。メディア・芸術学部准教授。主な翻訳担当に01年『コペンハーゲン』（新国立劇場）、03年『扉を開けて、ミスター・グリーン』（ひょうご舞台芸術）、12年『アテンブツ・オン・ハー・ライフ』（エイチ・エム・ピー・シアター・カンパニー）など。11年に『モジョ ミキボー』（オーウェン・マカファーティ作、鶴山仁演出）で第3回小田島雄志・翻訳戯曲賞受賞。兵庫県伊丹市在住。

小川絵梨子

Ogawa Eriko

東京都出身。聖心女子大学卒業後、ニューヨークへ渡り、アクターズスタジオ大学院にて演出を専攻する。卒業後、リンカーンセンター・ディレクターズラボに参加。平成17年度文化庁新進芸術家海外派遣制度2年制派遣員。現在、ニューヨークと東京を拠点に活動する。近年の演出作品『今は亡きヘンリーモス』の翻訳において第3回小田島雄志・翻訳戯曲賞を受賞。『12人 ～奇跡の物語』『夜の来訪者』『プライド』で第19回読売演劇大賞・杉村春子賞、同賞・優秀演出家賞を受賞。



エドワード二世

新訳上演
New Translation

Edward II

小劇場

●前売開始：2013年7月28日(日)

●料金 A：5,250円 B：3,150円

作：クリストファー・マーロウ

翻訳：河合祥一郎

演出：森 新太郎

出演：柄本 佑 安西慎太郎 窪塚俊介 下総源太郎 原 康義

木下浩之 大鷹明良 中村彰男 嵯川哲朗 谷田 歩

石住昭彦 小田 豊 西本裕行 中村 中（台本順）ほか

企画意図

就任4年目を迎える演劇芸術監督宮田慶子が、将来日本を背負って立つ新進演出家と対峙し、じっくりと作品を創ろうと企画したシリーズのひとつです。

2011年4月公演『ゴドーを待ちながら』（[JAPAN MEETS… ―現代劇の系譜をひもとく―] IV）でその演出力を高く評価された森新太郎が、イギリス・エリザベス朝演劇の代表的作家、クリストファー・マーロウ作『エドワード二世』に挑みます。今回のために河合祥一郎が新たに翻訳した台本での上演です。シェイクスピアと同時代のマーロウの作品は『ファウスト博士』『マルタ島のユダヤ人』など6作ですが、『エドワード二世』の本格的な日本での上演は初めてとなります。

シェイクスピアの先鞭をつけたといわれ、史劇『リチャード二世』にもその影響がうかがえるマーロウの歴史的群衆劇、森の緻密にして大胆な演出が大いに注目されるところです。

作品

実在のプラタジネット家イングランド王、エドワード二世（在位1307-27）の起伏に富んだ激しくも短い生涯を描いた歴史劇。

父王の死後、エドワード二世は貴族たちの助言にも関わらず、フランス人騎士ギャヴィストンを異常なほど寵愛し、多数の役職や地位を授ける。これが先王からの腹心の家臣たちより反感を買うこととなり、ついにギャヴィストンは追放される。エドワード二世は王妃イザベラの自分への愛情を利用しギャヴィストンを呼び戻させたが、復活したギャヴィストンの傍若無人さに、エドワード二世から真の愛情を得られない彼女は、愛人である貴族モーティマーと謀ってギャヴィストンをなぶり殺し、王を幽閉。その後、二人は王子（エドワード三世）への譲位を図り、エドワード二世を惨殺する。

翻訳家からのメッセージ

河合祥一郎

シェイクスピアと同年のクリストファー・マーロウはシェイクスピアに先駆けてブランク・ヴァースを用いた重要な劇作家であるにも拘わらず、日本では『ファウスト博士』以外はあまり上演されてこなかった。その意味で今回の上演は貴重であり、そのブランク・ヴァースのリズムを日本語でできる限り伝えるよう努力したつもりである。『エドワード二世』は、おぞましい殺され方をした王の悲劇として知られるが、既成の体制や常識に挑むマーロウの反骨精神に満ちている。そのスピリットが観客に伝わることを望んでいる。

演出家からのメッセージ

森 新太郎

物語の終盤、王冠を奪われたエドワード二世は地下牢に幽閉される。そして、汚物の浮かぶドブ泥に膝まで浸かりながら、こう嘆く。「わが王冠はどこだ？ なくなった、なくなった。それなのに私は生きているのか？」暗殺者が優しい声で答える。「お疲れになっているのです、陛下。横になってお休みなさい。」彼はエドワード二世をベッドの上に押さえつけると、その肛門に真っ赤な焼き串を突き刺して殺す……。

主人公の最期にしては、なんとまあ酷く、なんとまあ格好のつかない死に方であろう。この憐れみのなさ。そこがクリストファー・マーロウの劇世界と言える。そこにはただ、救われない人間たちが、救われないままに描かれている。復讐や裏切りといったドブ泥から脱け出せずに、誰もが無惨に、しかもあっさりと破滅していく——。400年も昔に書かれた戯曲ではあるが、現代にも通じる無意味なまでの暴力性に、私は強く興味を引かれた。

激しい舞台になると思います。ご期待ください。

エドワード二世

クリストファー・マーロウ

Christopher Marlowe

1564年イングランド、カンタベリー生まれ。劇作家、詩人、翻訳家。シェイクスピアに先駆けてエリザベス朝演劇の基礎を築いた人物のひとり。処女作はケンブリッジ大学在学中に執筆した『カルタゴの女王タイドー』。87年に上演された『タンバレイン大王』で劇作家として最初の成功を収める。他の作品に『ファウスト博士』『マルタ島のユダヤ人』『パリの虐殺』など。93年29歳のときにロンドン郊外の居酒屋で喧嘩に巻き込まれ、不慮の死を遂げたといわれる。



河合祥一郎

Kawai Shoichiro

1960年生まれ。東京大学教授。ケンブリッジ大学及び東京大学より博士号取得。主著に『ハムレットは太っていた!』（サントリー学芸賞受賞）、『謎解き「ハムレット」』『「ロミオとジュリエット」一恋におちる演劇術』『シェイクスピアの男と女』『The Routledge Companion to Directors' Shakespeare（共著）』ほか。角川文庫よりシェイクスピア新訳を刊行中。戯曲に『国盗人』『家康と按針』（共同執筆）。

森 新太郎

Mori Shintaro

東京都出身。演出家。演劇集団円、会員。主な演出作品に、リチャード・ビー作『ハーベスト』、デア・ローア作『最後の炎』（新国立劇場リーディング公演）などがあり、円では『ロンサム・ウェスト』『天使都市』『田中さんの青空』『孤独から一番遠い場所』『コネマラの骸骨』『死んでみたら死ぬのもなかなか四谷怪談 一恨（ハン）』『ガリレオの生涯』を演出。自身が主宰するモナカ興業でも活躍中。新国立劇場では2011年に『ゴドーを待ちながら』を演出。09年、毎日芸術賞演劇部門・第11回千田是也賞、第64回文化庁芸術祭賞優秀賞受賞。



ピグマリオン

新訳上演
New Translation

Pygmalion

中劇場

●前売開始：2013年9月1日(日)

●料金 S：8,400円 A：5,250円 B：3,150円

作： ジョージ・バーナード・ショー

翻訳：小田島恒志

演出：宮田慶子

出演：石原さとみ 平 岳大 網島郷太郎 増子倭文江 橋本 淳 春風ひとみ 安奈 淳 / 小堺一機 ほか

企画意図

世界的に有名なミュージカル『マイ・フェア・レディ』の原作である『ピグマリオン』。

ノーベル賞作家であるバーナード・ショーによって、ギリシャの伝説にあるキプロス島の彫刻家ピグマリオン
の話をベースに描かれた本作は、1913年ウィーンのホフブルグ劇場で初演、ロンドンでは14年ヒズ・マジエス
ティ劇場で上演されました。

自立した女性として生まれ変わったイライザが、ヒギンズ教授の元を立ち去り、生活力はないけれど自分を愛
する善良なフレディを選び出て行くラストシーンは、『マイ・フェア・レディ』でイライザが最終的にはヒギンズ
の元へ戻るロマンティックなラストと大きく違います。

原文の副題には A Romance in Five Acts (五幕のロマンス) とありますが、一人の女性の内的成長、それをと
りまく社会に対する風刺も効いたロマンス喜劇として描いたバーナード・ショーのシニカルな視点を、『ヘッダ・
ガーブレル』で新しいヘッダ像を造り出した宮田がどう演出するかが期待されます。

作品

ロンドンの下町に住む花売り娘のイライザは、ひょんなことから言語学者のヒギンズ教授と出会う。音声学の
権威で、発音を聞けばすぐにどこ出身かわかってしまう天才的な才能をもつヒギンズは、イライザのひどいな
まりや粗暴な態度にあきれ、このままでは一生底辺の生活から這い上がれないと罵倒し、さらに、私にかかれ
ば上流階級の婦人のように仕立ててみせるとからかう。

その翌日、イライザはヒギンズを訪問し言葉を教えてくれと頼む。面白い実験材料が来たと思ったヒギンズと
友人のピッカリング大佐は、イライザを舞踏会デビューさせ、スラム街出身をうまくごまかせるかどうかの賭け
をし、イライザを家に住ませ面倒をみるのだった。

過酷なレッスンを経て、ヒギンズ達の期待以上のレディに仕上がったイライザは、見事舞踏会で大成功をおさ
めるのだが……。

翻訳家からのメッセージ

小田島恒志

『ピグマリオン』の思い出

大学三年生のとき、演習の授業で『ピグマリオン』を読んだ。原書で外国の戯曲を読むのは、個人的な興味で読んでいたシェイクスピアを別にすれば、初めての経験だった。これがすこぶる面白かった。いわゆる輪読形式で、分担を割り振って読んでいったのだが、散文の「読み」以上に戯曲のセリフの解釈は人それぞれなのだとことを思い知ったのだ。なるほど、あいつはあそこを笑えるセリフととったわけか、とか、ああ、女性としてはここに怒りを読みとるのだな、とか。おまけに、教室では「訳読」する前に担当箇所の原文を声に出して読むわけだが、この戯曲ほど「音声」が意味を持つ本もそうはない。いつもは自分の英語のお粗末な発音にコンプレックスを感じていた僕も、この授業ではある程度貢献できたような気になった。うまい、へた、の問題ではなく、発音も人それぞれなのだとことを皆に実感させただろうから。ヒギンズ教授の矯正を受けた後の綺麗な発音は僕には到底無理だったけれども。

そして、もう一つ。有名な映画『マイ・フェア・レディ』とは違うということも知った。途中まではほぼ同じプロットで展開するのだが、映画を見た後の(たいていの映画はそうだが)「夢に浸っているような気分」と違って「夢から覚めた気分」、いや、「夢から覚まされた気分」になったのだ。僕が男だからだろうか？ そのときの初体験の実感を思い出しながら、20歳の頃の自分と相談しつつ、今、テキストを改めて読み直している。やっぱり面白い。

演出家からのメッセージ

宮田慶子

『ピグマリオン』の初演は1913年、今からちょうど100年前の作品です。

一人の下町娘が立派なレディに変身するという、いわば「サクセスストーリー」が、物語の軸となって展開しますが、その方法が「言葉」であるところに、この作品の最大の魅力があります。

下町言葉と上級言葉の違いを、英語から日本語に移し変える作業という意味で、新翻訳にこだわっている[JAPAN MEETS… 一現代劇の系譜をひもとく一] シリーズの第8弾として、最もふさわしく、又、興味深い上演であるといえます。

言葉は、その音声の中に、出自や生活環境、地域性、風土を映し出し、それによって、その人物の人生や、思考までもが既定されているという設定は、生きている人間すべてが何らかの“枠”にしばられていることを、シニカルに言い当てています。

人間が言葉を生むのか——？

言葉が人間を形作るのか——？

毒舌家、皮肉屋であり、常に本質を問い続けたバーナード・ショーならではの、機知とたくらみに富んだ作品です。

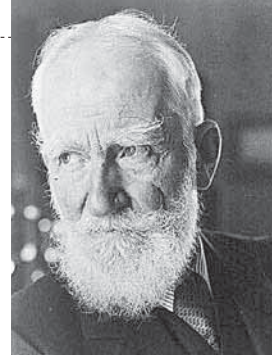
ミュージカル版である『マイ・フェア・レディ』とは違う、辛口な視点の生きた『ピグマリオン』を作りたいと思っています。

ピグマリオン

ジョージ・バーナード・ショー

George Bernard Shaw

1856年アイルランド、ダブリンに生まれる。劇作家、劇評家、音楽評論家、社会主義者。母親の跡を追い、76年ロンドンに出て、小説家を目指すが無敗。80年代から美術・音楽・演劇に評論の筆を振るう傍ら、マルクスの『資本論』を読んで社会主義の影響を受けた。84年、穏健な社会主義団体で、後にイギリス労働党の元となったフェビアン協会の創設直後に入会、以後、同協会の主要メンバーとして、パンフレットに講演に街頭演説にと大活躍した。92年『やもめの家』で戯曲デビュー。以後、半世紀以上の間に50編以上の戯曲を発表し、その奇抜な皮肉と辛らつな破壊力とを社会のあらゆる因習の上に浴びせかけた。代表作として、『人と超人』『ピグマリオン』『聖女ジョウン』など。1925年にノーベル文学賞受賞。英国その他の英語圏でシェイクスピアに次いで上演される劇作家。50年11月2日没。



小田島恒志

Odashima Koshi



現代イギリス小説、現代英米演劇。早稲田大学大学院博士課程、ロンドン大学大学院修士課程修了。現在、早稲田大学教授。D.H. ロレンスの小説と戯曲、戯曲翻訳の実際、現代英米演劇などを研究。『GHETTO / ゲットー』『エヴァ、帰りのない旅』『メッカへの道』『プルーフ / 証明』『グラディスおばあさんの画廊』『ジェイブス』『ニュルンベルク裁判』『グリマー・アンド・シャイン』『コミックポテンシャル』『BLACK BIRD』『ロックンロール』『叔母との旅』『欲望という名の電車』、新国立劇場では、『くしゃみ』『うら騒ぎ / ノイズ・オフ』『CLEANSKINS / きれいな肌』『シュート・ザ・クロウ』など翻訳多数。1996年、湯浅芳子賞受賞。日本英文学会、日本ロレンス協会会員、日本演劇学会会員。

宮田慶子

Miyata Keiko

P2 を参照。



アルトナの幽閉者

新訳上演
New Translation

Les Séquestrés d'Altona

小劇場

●前売開始：2013年12月14日(土)

●料金 A：5,250円 B：3,150円

作： ジャン＝ポール・サルトル

翻訳：岩切正一郎

演出：上村聡史

出演：岡本健一 美波 横田栄司 辻 萬長 ほか

企画意図

「Try・Angle ―三人の演出家の視点―」シリーズの第三弾は、文学座の上村聡史が、岩切正一郎の新たな翻訳によるサルトルの『アルトナの幽閉者』に挑みます。

1959年に発表された本作は、同年、パリにおいて初演。サルトルの創作劇としては最後の作品であり、『出口なし』『悪魔と神』と共にサルトルの三大劇の中に数えることができます。この作品は、当時のアルジェリア戦争でフランス軍などがアルジェリア人に対して行った拷問を問題化するために書かれており、舞台を第二次世界大戦に置き換えています。第二次世界大戦に従軍し、その戦争中の出来事により、心に深い傷を負い、終戦後、13年間も自宅に引きこもったままの生活が続ける主人公のフランツ。彼を軸に、サルトルは「戦争」と「責任」というテーマのみならず、出口の見えない状況に「幽閉」された人々の閉塞感と絶望を描いています。

作品

1959年のドイツ、造船業を営む社長(父親)宅で、咽頭癌に侵され余命6ヶ月の命と宣告された社長(父親)は、後継者を決めるために家族会議を開く。次男で弁護士のヴェルナーとその妻のヨハンナ、長女のレニが参加、父親はヴェルナーに会社を継がせ、この家に住ませようとするが、妻のヨハンナが反発する。一同の心に重くのしかかっているのは、長男のフランツの存在であった。

彼は13年前に死んだことになっているはずであったが、実は2階に幽閉されているのであった。フランツは第二次世界大戦中、部下の捕虜に対する拷問を制止出来なかったことから、心に深い傷を負い、それ以来、妹のレニの世話のもと、ずっと2階に引きこもったまま狂気の生活を送っていた。フランツを愛する父親の最後の望みは、長男への対面と次男夫婦による世話であった。ヨハンナの説得により、13年ぶりに待望の対面を果たした父親とフランツ。はたして一家の辿る運命は……。

翻訳家からのメッセージ

岩切正一郎

『アルトナの幽閉者』(1959年)は、アルジェリア戦争でフランス軍が行っていた拷問の問題を、第二次大戦の敗戦国ドイツでの物語に置き換えて扱っている作品だ。同じ敗戦国として、破壊、拷問、虐殺、戦争裁判、経済復興といった問題は、もし50年前にこの戯曲が日本で上演されたら、今よりもっと歴史的な切実さをもって観客に迫ったことだろう。

今、『アルトナ』は、そうした過去の記憶と重なりながら、また、3.11以降はふたたび廃墟、復興、「神話」崩壊のテーマを際立たせながら、50年前にはあまり切実とは見えなかったはずの一面をわれわれに突きつける。それは、生きる意味の喪失にすくみあがり苦しむ社会、ますます見えないものとなった〈他者〉によって一人ひとりが監禁されているように感じられる社会、自分のなかに巣食っている〈他者〉の欲望とイメージにみずからを合わせることで自己を疎外し、あるいはそれに疲弊して人が引きこもっている社会で暮らすわれわれに、みずからを切開するメスと病巣を見る鏡を手渡すように、迫ってくるのである。

『アルトナ』の人々は、われわれ誰もが狂っているように、狂っている。そして都合のいい真実だけを自分のものとして引き受け、欺瞞の幻想をつむぎながら、生きている。

風の吹いている、みんなが嘘をつき合っている町、それがヨハンナの幸福のイメージだ。われわれのなかに、これを偽善の名で平然と突っぱねることのできる者がいるだろうか？ だがまた、ためらわずそれに同意することのできる者もいるだろうか？ われわれにはどんな許しと和解が可能なのだろうか？

手強い芝居だ。だが劇場はサルトルを講じる哲学教室ではない。俳優が生身の人間としてもがき合う家族の対話へ、沈黙と叫びとさぐり合う言葉がぶつかりあう生の場合、訳の言葉を造っていければと思う。

演出家からのメッセージ

上村聡史

サルトル作品の中でも後期にあたる本作品は、フランスがナチスに虐げられた経験を顧みずアルジェリア戦争の際に行った拷問からサルトル自身が感じた“無条件の暴力”に対する考察が反映された作品です。敗戦後の復興を遂げていく西ドイツを舞台に設え、戦争体験の苦痛から、自らを幽閉した主人公フランツとその家族の葛藤が壮絶に描かれていきます。

現代日本を生きる私たちは2011年の痛烈な体験から資本社会における人間関係・他者の在り方を見直すことになりましたが、同時に戦後の日本人の在り方を問うことにもなりました。現代を生きる私たちが過去を今と切り離すのではなく、むしろ過去が自分自身の一部であるかのように捉えていく意識を持つ必要性を感じながら、一方で50年ほど前に書かれた『アルトナの幽閉者』では劇中フランツが三十世紀を生きる人間に向けて、自分の想いをテープへと吹き込んでいくシーンがあります。それは、あたかも輪廻していくであろう人類の営みの中で、自身の経験した悲惨な過去を血肉化しDNAとして残そうとする人間元来の姿のようでもあり、そのテープが再生される瞬間は、痛烈な過去が生み出した叫びがこれからの未来に刻まれていくようにも感じます。

観念的な理論で構成されたサルトルの世界観を、大きな人類の営みをも感じる神話的な広がりのある作品に仕立て、魂の叫びから生じる“生”の質感を劇空間へと表出できればと思います。

アルトナの幽閉者

ジャン＝ポール・サルトル

Jean-Paul Sartre

フランスの哲学者、小説家、劇作家、評論家。1905年パリ生まれ。“実存主義”を世に広め、世界中の若者に大きな影響を与えた、第二次大戦後の世界の代表的知識人である。小説『嘔吐』(38年)、論文『存在と無』(43年)で名声を博した。43年の『蠅』の上演により劇作家としてもその名を馳せたサルトルは、44年に『出口なし』、『墓場なき死者』、『恭しき娼婦』(46年)、『汚れた手』(48年)、『悪魔と神』(51年)、『キーン』(53年)、『ネクラソフ』(55年)と矢継ぎ早に戯曲を発表した。59年に発表された『アルトナの幽閉者』は創作劇としては最後のものである。



岩切正一郎

Iwakiri Shoichiro

1959年、宮崎県生まれ。フランス文学者。国際基督教大学教授。戯曲の翻訳に『ひばり』(ジャン・アヌイ)、『カリギュラ』(アルベール・カミュ)など。著書に『さなぎとイマーゴ: ボードレールの詩学』、翻訳書に『ノアノア』(ポール・ゴーギャン)、『世界文学空間 文学資本と文学革命』(パスカル・カザノヴァ)など。2008年、『ひばり』と『カリギュラ』の翻訳によって、優れた戯曲翻訳に贈られる湯浅芳子賞を受賞。新国立劇場では11年『ゴドーを待ちながら』(演出・森新太郎)の翻訳を手掛けている。



上村聡史

Kamimura Satoshi

1979年、東京生まれ。2001年文学座附属演劇研究所41期生として入所。06年座員に昇格。文学座の公演に演出部として参加しながら、木村光一、鷗山仁の演出助手を経て、05年アトリエの会『焼けた花園』にて初演出。また翌年06年アトリエの会で上演された『Awake and Sing!』が好評を博し、優れた舞台芸術の再演と放送を企画するNHKシアターコレクション08にて再演される。09年より文化庁新進芸術家海外留学制度により1年間イギリスに留学。主な演出作品に『ミセス・サヴェッジ』『棒になった男』『連結の子』『ポルノグラフィ』『千に砕け散る空の星』、オペラ『人間の声』など。



マニラ瑞穂記

History of Mizuho in Manila

小劇場

●前売開始：2014年2月15日(土)

作：秋元松代

演出：栗山民也

出演：千葉哲也 山西 惇 稲川実代子

古河耕史 高島レイ 前田一世 宇井晴雄 西原康彰 藤井咲有里

今井 聡 斉藤まりえ 仙崎貴子 日沼さくら 梶原 航 ほか

企画意図

新国立劇場では、新国立劇場研修所修了生に多くの機会を与える公演として2013年3月に福田善之作『長い墓標の列』を企画しました。引き続き第二弾として、秋元松代の名作『マニラ瑞穂記』を上演いたします。明治半ば、理想の世界を求めてアジアへと向かった多くの人たちを中心に、時代に翻弄される日本と日本人の歴史を鋭く突いたこの作品の中で描かれる世界は、現代の日本を生きる我々にとっても決して過去の出来事ではありません。

主人公の秋岡伝次郎は、明治から昭和にかけてアジアで活躍した村岡伊平治をモデルとしています。今村昌平監督・緒形拳主演の映画『女衞』はこの村岡をイメージして描かれていますが、秋元松代自身も『マニラ瑞穂記』と別に『村岡伊平治伝』という作品も執筆しており、いかにこの村岡という人物が創作意欲を掻き立てるかわかります。

『マニラ瑞穂記』、この重厚で大きな物語が、栗山演出により刺激的な舞台として蘇ります。

作品

1898年(明治31年)。マニラの日本領事館には、内乱と戦争暴動化した民衆から逃げて、在留邦人が避難していた。そこには、フィリピンの独立運動を支援しようと日本から渡った志士達や、からゆきさん達がさまざまな思いを抱えながら居合わせていた。そんな中、日本領事である高崎碌郎のもとに、シンガポールで別れ日本に帰ったはずの秋岡伝次郎があらわれる……。

賤しい生業をしていますが、南洋において自分が日本人であるという誇りを忘れず、天皇陛下を崇拝し、愛国精神にのっとり行動する奇妙な男秋岡。かつてシンガポールで女衞をやっていた秋岡は、高崎によって仕事を奪われ、開拓、真珠採掘、行商とさまざまな仕事については統治者によって邪魔され、フィリピンに密入国の末、領事館までたどり着いたのだった。

フィリピン独立の為に、アメリカと共闘していると信じていた志士達だが、だんだんとアメリカのフィリピン植民地化への野望が見えてきていた。内地で働いても身を立てられなかった多くの日本人の魂の為に、マニラ瑞穂館を建てようと夢見る秋岡は、志士たちのパトロンとなる。

スペイン軍が降伏し、アメリカ軍が勝利したと連絡が入ったが、一時的に成立した共和政府はアメリカの資本に負けて半年で崩壊し、マニラ瑞穂館は崩壊する。そして、アメリカ軍が彼らにとった行動は……。

演出家からのメッセージ

栗山民也

秋元松代さんの戯曲は、学生の頃から愛読していた。だから、何度も読み返しては、いろいろな舞台空間を空想し、勝手に組み立て、その世界のなかでその軽妙な言葉のやりとりを楽しんだ。

2年前、新国立劇場演劇研究所第4期生の試演会で上演した秋元さんの『マニラ瑞穂記』を、今回、本公演として上演することになった。試演会では、稽古場を自由に組み立てて創った簡潔な美術だったが、今回は小劇場の空間がより密に、110数年前のあの熱を帯びたマニラの風景として、生まれ変わればと思っている。

この作品は悲喜劇でありながら、実に鋭く歴史への問題意識がドラマの底に書き込まれている。複数の立場に立つ登場人物たちの執拗なまでの好奇心と絡み合いつつ、自在にドラマは動く。鮮やかに現代へと繋がれた主題は、登場人物それぞれの夢として響き合い、健在である。

研究所修了生を中心とした若いメンバーの成長も、観てほしい。

マニラ瑞穂記

秋元松代

Akimoto Matsuyo

1911年生まれ。戦後、三好十郎に師事してラジオドラマなどを執筆。47年に初の戯曲『軽塵』を発表、49年の『礼服』が劇団俳優座によって上演され、注目を集める。その後60年『村岡伊平次伝』、64年『常陸坊海尊』（田村敏子賞・芸術祭賞受賞）、69年『かさぶた式部考』（毎日芸術賞受賞）、75年『七人みさき』（読売文学賞受賞）などを執筆、日本各地の説話・伝記などに材を採った重厚な作風で高い評価を得た。79年には紫綬褒章を受章。さらに、79年初演の蜷川幸雄演出の『近松心中物語』は、キャストを変えて通算上演回数1000回を超える人気の舞台となった。ほかに蜷川幸雄演出で80年『元禄港歌』、82年『南北恋物語』がある。2001年逝去。その年に創設された朝日舞台芸術賞に「秋元松代賞」が設けられていた。



栗山民也

Kuriyama Tamiya

早稲田大学文学部演劇科卒業。主な演出作品に『GHETTO／ゲッター』『太鼓たたいて笛ふいて』『マリー・アントワネット』『ロマンス』『炎の人』『組曲虐殺』『日本人のへそ』などがある。紀伊國屋演劇賞、読売演劇大賞最優秀演出家賞、芸術選奨文部大臣新人賞、毎日芸術賞千田是也賞、朝日舞台芸術賞などを受賞。新国立劇場では『今宵かざりは…』『ブッダ』『キーン』『夜への長い旅路』『欲望という名の電車』『ピカドン・キジムナー』『夢の裂け目』『ワーニャおじさん』『櫻の園』『浮標』『夢の泪』『涙の谷、銀河の丘』『世阿彌』『胎内』『喪服の似合うエレクトラ』『箱根強羅ホテル』『母・肝っ玉とその子供たち』『夢の痂』『CLEANSKINS／きれいな肌』『氷屋来たる』『まぼろば』『雨』、オペラ『夕鶴』『蝶々夫人』を演出。著書に『演出家の仕事』。新国立劇場演劇芸術監督を7シーズン務め、現在、新国立劇場演劇研修所所長。

テンペスト

The Tempest

中劇場

●前売開始：2014年3月8日(土)

作：ウィリアム・シェイクスピア

翻訳：松岡和子

演出：白井 晃

企画意図

『テンペスト』はシェイクスピアが単独で執筆した最後の戯曲です。ダイナミックな「歴史劇」から始まり、抱腹絶倒「喜劇」、そして人間の存在意義を極限まで突き詰めた重厚な「悲劇」を経て、最後にシェイクスピアが辿り着いた劇世界が、まるで嵐のあとの嵐のような透明感漂う「ロマンス劇(伝奇劇)」と呼ばれる作品群でした。そこでは運命や大自然の猛威によって引き裂かれた家族の、神の導きによつての再会、憎しみ合った者たちが時の流れによって和解に至る、いわば人間礼賛、人間肯定に満ちたシェイクスピアのメッセージを読み取ることができます。

彼の死後7年経って出版された最初の全集、ファーストフォリオの巻頭を飾ったのもこの戯曲で、同時代人にとって人気の舞台であり、21世紀の今日でも、2012年ロンドンオリンピック、パラリンピックの両開会式のテーマが『テンペスト』であったことは、現代の人々にとってもこの戯曲が新鮮で親しみ易いことの証左にほかなりません。また『ハムレット』『ロミオとジュリエット』と並び、数多く映像化されたこともこの作品の特徴で、多くの演出家、映像作家のイマジネーションを刺激し続けています。

今回、新国立劇場初登場となる『テンペスト』を演出するのは、11年11月、『天守物語』で泉鏡花の耽美世界を見事に現代に甦らせた白井晃。彼がシェイクスピア晩年のこの傑作を、どう舞台化するのか期待が高まります。

作品

元ミラノ大公プロスペローは12年前、弟アントーニオとナポリ王アロンゾーの謀略によりその地位を追われ、娘ミランダとともに海に流された。やがて漂着した孤島で魔術の修練を積み、空気の精エアリエル、醜い怪物キャリバンを従えて暮らしていた。その島は豊かな自然に恵まれ、妙なる楽の音がこだまする一種の桃源郷であった。

そこにアントーニオ、アロンゾー一行の乗った船が差し掛かると、船は突然の嵐に遭遇し、全員命からがら島に上陸する。だがその嵐は一行の到来を知ったプロスペローが魔術で起こした嵐だった……。

演出家からのメッセージ

白井 晃

『テンペスト』はシェイクスピアの最後の作品であり、プロスペローの最後の台詞は、劇世界を締めくくる自らの姿を重ねているといわれている。

私がこの『テンペスト』を通して頭から離れないのは、この作品の舞台となっている孤島の意味である。プロスペローはこの島に、魔術を使って自分を国から追い出した者たちを集める。そして人生の和解と新生を試みる。

私は、この海に浮かぶ島を考える時、旧ソ連邦の映画監督タルコフスキーの『惑星ソラリス』を思い出す。海に覆われた惑星ソラリスは、海そのものが知性を持ち人の思考を浸食する。私は夢想する。この孤島を取り囲む海とは、プロスペローの思考そのものであり、この島とは彼の記憶の集積地であると。

われわれを取り囲む世界とは、とどのつまり自分の脳味噌の中での再構築でしかない。人生の消滅を前にしたプロスペローが、自分の記憶の中に過去の人々を呼び込み、娘に託して世界の再生を願ったとしたら。

今、私が想像するのは、劇場の舞台に小さな海を創り、その上に自分の記憶が詰まった島を浮かべ、それを静かに見下ろすひとりの男の姿である。

テンペスト

ウィリアム・シェイクスピア

William Shakespeare

イギリス、エリザベス朝時代の劇作家、詩人。生涯に37本を越える劇作を残し、死後出版された全集ではその作品が歴史劇、悲劇、喜劇に分類された。シェイクスピアが単独で執筆した最後の戯曲、『テンペスト』はその巻頭を飾り、喜劇に分類されているが、晩年の四作品（『ペリクリース』『シンベリン』『冬物語』『テンペスト』）はロマンス劇と呼ばれることもある。37本の戯曲は21世紀の今日に至るまで、本国イギリスは言うに及ばず全世界で上演され続けている。我が国でも、明治期に翻案作品が紹介されて以来さまざまな形で上演され、伝統演劇から小劇場の公演まで広範囲に影響を与えている。



白井 晃

Shirai Akira

演出家・俳優。京都府出身。遊●機械／全自動シアター（1983～2002）の活動を経て、現在はストレートプレイから音楽劇、オペラまで幅広く手掛ける。美意識の高い、緻密な舞台演出で定評がある。02、03年と連続して第9、10回読売演劇大賞優秀演出家賞受賞。05年『偶然の音楽』の脚色に対して湯浅芳子賞、12年『魔笛』にて第10回佐川吉男音楽賞を受賞。近年の主な演出作品に、世田谷パブリックシアター『ガラスの葉』『4four』、まつもと市民芸術館『エドワード・ボンドのリア』『メルセデス・アイス』、バルコ『中国の不思議な役人』『幽霊たち (Ghosts)』、東宝『GOLD ―カミューとロダン』『幻蝶』、TBS『ジャンヌ・ダルク』、まつもと市民オペラ『魔笛』など。新国立劇場では05年『うら騒ぎ／ノイズ・オフ』、08年『混じりあうこと、消えること』、11年『天守物語』を演出。

十九歳のジェイコブ

2014.6

新作
New Play

Nineteen-year-old Jacob

小劇場

●前売開始：2014年4月6日(日)

原作：中上健次

台本：松井 周

演出：松本雄吉

企画意図

終生「路地」にこだわり、人間の業やほとぼしる生命への執着を描き続けた作家、中上健次。46歳という若さで急逝してから20年、彼の小説を新進気鋭の劇作家・松井周が舞台化します。演出には大阪を拠点に他の追随を許さないダイナミックな野外劇を40年にわたり展開してきた「維新派」の松本雄吉を迎え、新国立劇場・小劇場に「路地」に生きる人々を描き出す意欲作です。

作品

中上健次の小説『十九歳のジェイコブ』を主人公・ジェイコブとユキとの友情、もしくは愛情の物語として戯曲化。

放浪する者たちにとっての教会であるジャズ喫茶、讃美歌としてのジャズ。ジェイコブの叔父、高木直一郎が破壊していった「路地＝聖地」を失ったジェイコブは、新しい聖地を求めてさまよう。

ジェイコブとは正反対のタイプであるユキも「古き良き故郷＝家族」を失い、「変わりきった故郷＝父の大企業の権力下にある」に憎悪の念を抱いている。

マイルス・デイビスの Sketches of Spain に郷愁を感じることもあれば、アルバート・アイラーの Spiritual unity に身を任せて空っぽになるジェイコブ。

ヤコブ(兄を出し抜いた者の意味)の英語読みであるジェイコブは兄の自殺や叔父・直一郎の冷血な振る舞いと腹違いの妹などに罪の意識を感じ、自身を汚しきることと教会＝ジャズ喫茶に通うことでバランスを取ろうとしているのかもしれない。

ジャズによって呼び覚まされるジェイコブの記憶がまとわりついては去っていく追憶の物語である。

台本作家からのメッセージ

松井 周

中上健次に松本雄吉さんという組み合わせを聞いて興奮した。もし中上健次が生きていて、戯曲を提供する機会があったら凄まじい作品が出来上がったのではないだろうか。

もちろん、それは叶わない夢なので、さてどうしようと途方に暮れた。何故なら、僕の中で、中上健次という存在は山脈のように高く、遠くに存在しており、うかつに手を出すと怪我をする気がしたからだ。実際、一作品読むだけでぐったりする。しかも、小説として完成されているという印象が強く残るものが多い。

ただ、『十九歳のジェイコブ』という作品に出会って、これはもしか、と思った。ジャズの音や夕焼けの光をバシバシと浴びているうちに、誰かにとっての記憶と現実の境目が溶け出すような作品（個人的なイメージ）だったからだ。演劇にとって、五感を刺激しながら「今、ここ」と「虚構」を混ぜ合わせていくのは得意分野であり、しかも、松本さんにもつながる線があるに違いないと、ひとり盛り上がった。

しかし、この作品、読めば読むほどわからなくなるのも事実。ジェイコブという人物の不可思議さ、登場人物のディスコミュニケーション、そして何より作品世界全体を覆う不能感。とはいえ、それらこそが現代に通じる要素だとも思っているので、先は長いが旅するように書いていこう。

演出家からのメッセージ

松本雄吉

十九歳のジェイコブへ

中上健次の聴覚を可視化すること……、「ジェイコブにはそのコルトレーンのアルトサックスが音ではなく音のひとつひとつを強い喉の力で潰すために吹いていると聴こえた」この聴覚。「風が吹き上がって草むらを揺り、音が一斉に鳴る。音はわきあがり潰れ、わきあがる」音が消えるのではなく潰れるという。さらに「ジョン・コルトレーンの吹く音が、音ではなく風、風ではなく此处と彼方の境目にある祈りのようなものであることに気づいていた」この越境の聴覚。さらに「音の芯は直接耳から心臓を貫く。その針のようにとがった音の芯は心臓から血管に入り、ジェイコブの体そのものがジャズの共鳴板になっている」この身体性。ジャズを聴く中上健次の異質な聴覚がこの文学の基底にある。彼の聴覚を頼りに、音楽ではなく、音そのものによる演劇、音によって呼び込まれる風景のあらわれよう、それを舞台上に可視化すること、今回初めてタグを組む脚本の松井周と若い俳優たちとそのことの可能性をじっくりと探してみたい。

十九歳のジェイコブ

中上健次

Nakagami Kenji

1946年、和歌山県新宮市生まれ。和歌山県立新宮高校を卒業と同時に上京。同人誌「文芸首都」で執筆活動を開始し、76年『岬』で第74回芥川賞を受賞。戦後生まれ初の受賞者となる。77年、長編小説『枯木灘（かれきなだ）』で第31回毎日出版文化賞、翌年同作品で第28回芸術選奨文部大臣賞新人賞受賞。他に、『地の果て 至上の時』『日輪の翼』『讃歌』『千年の愉楽』『奇蹟』『異族』などの長編小説に加え、『化粧』『水の女』『熊野集』『重力の都』など数多くの短編小説集、紀伊半島のルポルタージュ『紀州〜木の国根の国物語』や脚本など。92年8月12日永眠。享年46歳。



松井 周

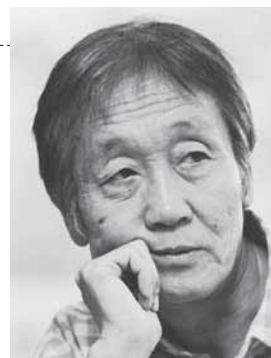
Matsui Shu

1972年、東京都出身。96年に平田オリザ率いる劇団「青年団」に俳優として入団。その後、作家・演出家としても活動をはじめ、2004年青年団若手自主企画公演『通過』（第9回日本劇作家協会新人戯曲賞入賞）、05年『ワールドプレミア』（第11回同賞入賞）、06年『地下室』、07年『シフト』を経て、同年9月『カロリーの消費』により劇団「サンプル」を旗揚げし、青年団から独立。バラバラの、自分だけの地図を持って彷徨する人間たちを描きながら、現実と虚構、モノとヒト、男性と女性、俳優と観客、などあらゆる関係の境界線を疑い、踏み越え、混ぜ合わせることを試みている。作品が翻訳される機会も増え『シフト』『カロリーの消費』はフランス語に、『地下室』はイタリア語に翻訳されている。08年『家族の肖像』、09年『あの人の世界』は、それぞれ第53、54回岸田國士戯曲賞最終候補にノミネート。近年は大学講師、小説やエッセイなどの執筆活動、CMや映画、ドラマへの出演など幅広い活躍を行う。10年『自慢の息子』で第55回岸田國士戯曲賞を受賞。

松本雄吉

Matsumoto Yukichi

維新派主宰、劇作家・演出家。1946年熊本県天草生まれ。野外公演にこだわり、映画さながらの大規模なセットや、独自のスタイル「チャンチャン☆オペラ」を確立し、70年の結成以来一貫してオリジナル作品を上演している。代表作に『さかしま』（奈良・室生）や、『台湾の、灰色の牛が背のびをしたとき』（岡山・犬島）がある。オセアニアやヨーロッパ、中南米など、海外でも屋内外問わず作品を発表している。これまでに朝日舞台芸術賞や芸術選奨文部科学大臣賞などを受賞し、2011年には紫綬褒章受章。



永遠の一瞬 (仮題)

— Time Stands Still —

2014.7

日本初演
Japan Premiere

小劇場

●前売開始：2014年5月10日(土)

作： ドナルド・マーグリーズ

翻訳：常田景子

演出：宮田慶子

企画意図

欧米の良質な同時代作品の中から、日本未上演のものを選びすぐって紹介していこうという意図のもと、2012年に宮田慶子演出で上演した『負傷者16人』に続いて、00年『ディナー・ウィズ・フレンズ』でピュリッツァー賞を受賞したドナルド・マーグリーズの『永遠の一瞬』(仮題)を取り上げます。

この作品は09年2月にロサンゼルス・ゲッフェン・プレイハウスで初演されました。10年にはニューヨークのマンハッタン・シアター・クラブで上演、ニューヨーク・タイムズなどで賞賛され、作品賞と主演女優賞の2部門でトニー賞にノミネートされています。

イラク戦争時、戦場で取材をする女性ジャーナリストを中心に、彼女を取り巻く人々のそれぞれの人生の変化を描いた本作は、近年も各地で上演を重ねています。日本での上演は初めてとなります。

作品

舞台はブルックリン。イラク戦争の取材中、路上爆弾で負傷したフォト・ジャーナリストのサラ。事故当時ニューヨークにいたボーイフレンドでレポーターのジェイムズは、いたたまれない思いで迎えに行き、二人でアパートに帰ってくる。

彼らの家に、写真編集者の友達リチャードが、彼よりかなり若く新しいガールフレンドのイベント・プランナー、マンディーを伴い見舞いに訪れる。……ギブスをしていた足、包帯で吊っていた片腕、爆弾の破片による顔の傷あとが癒えるころ、サラとジェイムズの関係にも変化が訪れる。

翻訳家からのメッセージ

常田景子

ニューヨークで『ディナー・ウィズ・フレンズ』を見て以来、いつかドナルド・マーグリーズの戯曲を訳したいと思っていました。『ディナー・ウィズ・フレンズ』は小田島恒志さん訳、宮田慶子さん演出で、日本でも上演されました。今回ついにマーグリーズの戯曲を翻訳することができて、大変うれしく存じます。この戯曲は、紛争地帯を報道するジャーナリズムが大きなテーマになっています。そういう報道に対しては、「命をかけて事実を世界に知らせている」という称賛の声とともに、「何をわざわざ、そんな危険なところに行くんだ？」という批判もあります。四人の登場人物はそれぞれ、自分は人生に何を求めているのかを自らに問いかけます。誰が正しいとか、間違っているとかいうことはなく、人は誰も自分が本当に求めるものを追いかけていくほかに、生きる道はないのだということを深く感じさせてくれる戯曲です。

演出家からのメッセージ

宮田慶子

今なお、世界のいろいろな地域で、根深い問題を抱え、その解決点が見つからないまま、爆撃やテロという悲劇が繰り返されています。報道でそのことを知りながらも私達は、「何をしたら良いのか」「何ができるのか」「どうしたらこの争いをおさめることができるのか」と考え続け、「誰ひとりとして、その答えを持ち得ないのではないか…」——そんな絶望的な想いにとらわれたりもします。

世界の構造の中で、今や、紛争の要因は、単に当事者同志の争いでなく、強大な国々の利権や政治がそれらを後押ししていることも、自明の事として理解し、まずはこうして日々安全に暮らしている我々の生活が、実は彼等とつながり、時にはその犠牲の上に成り立っていることすら認識しています。

けれど、その自覚を頭の隅に追いやって、目の前の生活に甘んじている……。

2009年に発表されたこの作品は、まさに、そんな現代に生きる私達の“胸の闇”を突いてきます。

身近な視点から、大きな世界をとらえようとした、「現代を生きる人間の立ち位置」を等身大で問いかけてくる舞台になれば、と願っています。

永遠の一瞬 (仮題) — Time Stands Still —

ドナルド・マーグリーズ

Donald Margulies

1954年生まれ。アメリカの劇作家。イエール大学教授。82年『ルナ・パーク』で劇作家としてのニューヨーク・デビューを飾る。99年11月にオフ・ブロードウェイで開幕した『ディナー・ウィズ・フレンズ』がロングランとなり、2000年のピューリッツァー賞を受賞、のちに映画化もされている。日本で上演された作品に『短編集』『ディナー・ウィズ・フレンズ』『ブルックリン・ボーイ』がある。その他に『The Loman Family Picnic』『The Model Apartment』『Sight Unseen』などがある。



©photo by Ethan Hill



常田景子

Tsuneda Keiko

東京大学文学部心理学科卒。在学中、劇団夢の遊眠社に入団。文学座附属演劇研究所20期。木山事務所、NOISEなどで俳優として活動しながら翻訳を始め、パルコ劇場制作部を経て、現在は演劇脚本を中心に翻訳に携わる。初上演作品は1993年『滅びかけた人類、その愛と本質とは…』、2001年第8回湯浅芳子賞、翻訳・脚色部門受賞。近年の主な作品に『エンロン』『ピアフ』『太陽に灼かれて』『グレンギャリー・グレン・ロス』『6週間のダンスレッスン』『シカゴ』『デモクラシー』など。新国立劇場では『やけたトタン屋根の上の猫』『負傷者16人』など。主な翻訳書に『ヴァドゥーの神々』『戯曲の読み方』『現代戯曲の設計』『リディキュラス!』など。

宮田慶子

Miyata Keiko

P2を参照。



PLAY

公演一覧

開場記念公演～2012/2013シーズン

★＝新作

シーズン	演目	作	訳・脚色	演出	公演初日
開場記念公演	紙屋町さくらホテル★	井上ひさし		渡辺浩子	97.10/22
	〔蒲田行進曲完結編〕銀ちゃんが逝く	つかこうへい		つかこうへい	97.11/13
	夜明け前	原作 島崎藤村	脚色 村山知義 補訂脚本 津上 忠	木村光一	97.12/4
	リア王	ウィリアム・シェイクスピア	松岡和子	鶴山 仁	98.1/17
1998/ 1999	虹を渡る女★	岩松 了		岩松 了	98.5/7
	幽霊はここにいる	安部公房		串田和美	98.5/12
	今宵かざりは…★ 1928 超巴里井主義宣言の夜	竹内統一郎		栗山民也	98.6/12
	音楽劇 ブッダ★	原作 手塚治虫	脚本 佐藤 信	栗山民也	98.9/7
	THE PIT フェスティバル				
	カストリ・エレジー スタインベック「二十日鼠と人間」より	脚本 鐘下辰男		鐘下辰男	98.10/3
	神々の国の首都	坂手洋二		坂手洋二	98.10/17
	寿歌	北村 想		北村 想	98.10/29
	ディア・ライアー すてきな嘘つき	ジェローム・キルティ	丹野郁弓	宮田慶子	98.11/4
	野望と夏草	山崎正和		西川信廣	98.12/2
	新・雨月物語★	脚本 鐘下辰男		鶴山 仁	99.1/11
	子午線の祀り	木下順二	演出 観世栄夫／内山 鶴 酒井 誠／高瀬精一郎		99.2/3
	セツァンの善人	ヘルトルト・ブレヒト	松岡和子	串田和美	99.5/18
	羅生門	原作 芥川龍之介		構成・演出 渡辺和子	99.6/4
	棋人 ―チーレン―	過 士行	菱沼彬晃	林 兆華	99.7/1
1999/ 2000	キーン 或いは狂気と天才	J.P.サルトル 上演台本 栗山民也／江守 徹	鈴木力衛	栗山民也	99.10/4
	美しきものの伝説	宮本 研		木村光一	99.11/4
	―森本薫の世界―				
	かくて新年は	森本 薫		宮田慶子	99.12/8
	怒濤	森本 薫		マキノノゾミ	00.1/11
	華々しき一族	森本 薫		鐘下辰男	00.2/9
	新・地獄変★	原作 芥川龍之介	脚本 鐘下辰男	鶴山 仁	00.3/23
	なよたけ	加藤道夫		木村光一	00.4/11
	夜への長い旅路	ユージン・オニール	沼澤治治	栗山民也	00.5/11
	マクベス	ウィリアム・シェイクスピア	福田恆存翻訳より 潤色 鐘下辰男	鐘下辰男	00.9/8
2000/ 2001	ブロードウェイ・ミュージカル 太平洋序曲	作曲・作詞 スティーブン・ソンドハイム 台本 ジョン・ワイドマン	翻訳・訳詞 橋本邦彦	演出・振付 宮本亜門	00.10/2
	欲望という名の電車	テネシー・ウィリアムズ	鳴海四郎	栗山民也	00.10/20
	シリーズ「時代と記憶」				
	memorandum メモランダム★	構想・構成 ダムタイプ			00.11/27
	母たちの国へ★	松田正隆		西川信廣	01.1/10
	ピカドン・キジムナー★	坂手洋二		栗山民也	01.2/10
	こんにちば、母さん★	永井 愛		永井 愛	01.3/12
	夢の裂け目★	井上ひさし		栗山民也	01.5/8
	紙屋町さくらホテル	井上ひさし		渡辺浩子／井上ひさし	01.4/4
	廣作・桜の森の満開の下	野田秀樹		野田秀樹	01.6/1

シーズン	演目	作	訳・脚色	演出	公演初日
2001/ 2002	海外招待作品 Vol.1 太陽劇団 堤防の上の鼓手	エレーヌ・シクスー	字幕翻訳 松本伊瑳子	アリアーヌ・ムヌーシュキン	01.9/7
	コペンハーゲン	マイケル・フレイン	平川大作	鶴山 仁	01.10/29
	美女で野獣★	荻野アンナ		宮田慶子	01.12/10
	シリーズ チェーホフ・魂の仕事				
	Vol.1 かもめ	アントン・チェーホフ	英訳 マイケル・フレイン 翻訳 小田島雄志	マキノノゾミ	02.1/11
	Vol.2 くしゃみ /the Sneeze	アントン・チェーホフ	台本 マイケル・フレイン 翻訳 小田島恒志	熊倉一雄	02.2/28
	Vol.3 「三人姉妹」を追放されし トゥーゼンバフの物語 ★	岩松 了		岩松 了	02.4/1
	Vol.4 ワーニャおじさん 四幕の田園生活劇	アントン・チェーホフ	小野理子	栗山民也	02.5/9
	Vol.5 櫻の園	アントン・チェーホフ	演色 堀越 真 (神西清翻訳による)	栗山民也	02.6/21
2002/ 2003	その河をこえて、五月★	平田オリザ／金 明和		李 炳熹／平田オリザ	02.6/3
	海外招待作品 Vol.2 国際チェーホフ演劇祭 in モスクワ ハムレット	ウィリアム・シェイクスピア		ペーター・シュタイン	02.9/7
	ブロードウェイ・ミュージカル 太平洋序曲	作曲・作詞 スティーブン・ソンドハイム 台本 ジョン・ワイドマン	翻訳・訳詞 橋本邦彦	演出・振付 宮本亜門	02.10/11
	メヤジルシ ―誘われて★	太田省吾		太田省吾	02.11/12
	シリーズ「現在へ、日本の劇」				
	①ピルグリム	鴻上尚史		鴻上尚史	03.1/14
	②浮標	三好十郎		栗山民也	03.2/19
	③マッチ売りの少女	別役 実		坂手洋二	03.4/8
	④サド侯爵夫人	三島由紀夫		鐘下辰男	03.5/26
2003/ 2004	涙の谷、銀河の丘★	松田正隆		栗山民也	03.5/13
	ゴロヴリョフ家の人々★	原作 サルティコフ・シチェドリン	翻訳 湯浅芳子 脚本 永井 愛	永井 愛	03.6/18
	nocturne ―月下の歩行者★	構成 松本雄吉		松本雄吉	03.9/8
	夢の泪★	井上ひさし		栗山民也	03.10/9
	世阿彌	山崎正和		栗山民也	03.11/27
	シリーズ「女と男の風景」				
	①海外招待作品 Vol.3 香港・劇場組合 The Game /ザ・ゲーム	ウジェーヌ・イヨネスコの悲喜劇「椅子」より 翻案 ジム・チム／オリヴィア・ヤン	字幕 角田美知代	ジム・チム／オリヴィア・ヤン	04.2/20
	②THE OTHER SIDE ／線のむこう側★	アリエル・ドーフマン	水谷八也	孫 振策	04.4/12
	③てのひらのこびと★	鈴江俊郎		松本祐子	04.5/11
2004/ 2005	④請願 静かな叫び	ブライアン・クラーク	吉原豊司	木村光一	04.6/22
	こんにちは、母さん	永井 愛		永井 愛	04.3/10
	透明人間の蒸気	野田秀樹		野田秀樹	04.3/17
	ブロードウェイ・ミュージカル INTO THE WOODS	作曲・作詞 スティーブン・ソンドハイム 台本 ジェイムズ・ラパイン	翻訳・訳詞 橋本邦彦	演出・振付 宮本亜門	04.6/9
	* 胎内	三好十郎		栗山民也	04.10/4
	* ヒトノカケラ★	篠原久美子		宮崎真子	04.10/22
	* 二人の女兵士の物語★	坂手洋二		坂手洋二	04.11/8
	喪服の似合うエレクトラ	ユーージン・オニール	沼澤治治	栗山民也	04.11/16
	城★	原作 フランツ・カフカ	構成 松本 修	松本 修	05.1/14
	シリーズ 笑い				
	①花咲く港	菊田一夫		鶴山 仁	05.3/14
	②コミュニケーションズ★ 現代劇作家によるコント集	作 綾田俊樹／いとうせいこう／ケラリーノ・サンドロヴィッチ／杉浦久幸 高橋徹郎／竹内 佑／鄭 義信／土田英生／別役 実／ふじきみつ彦／武藤真弓 原作使用 筒井康隆		構成・演出 渡辺えり子	05.4/8
	③箱根強羅ホテル★	井上ひさし		栗山民也	05.5/19
	④うら騒ぎ ノイゼズ・オフ	マイケル・フレイン	小田島恒志	白井 晃	05.6/27
	その河をこえて、五月	平田オリザ／金 明和		李 炳熹／平田オリザ	05.5/13
	海外招待作品 Vol.4 ベルリナー・アンサンブル アルトウロ・ウイの興隆	ベルトルト・ブレヒト	イヤホンガイド翻訳 新野守広	ハイナー・ミュラー	05.6/22

シーズン	演目	作	訳・脚色	演出	公演初日
2005/ 2006	* 黒いチューリップ／盲導犬	唐 十郎		中野敦之	05.9/27
	* 屋上庭園／動員挿話	岸田國士		宮田慶子〈屋上庭園〉 深津篤史〈動員挿話〉	05.10/31
	母・肝っ玉とその子供たち —三十年代戦争年代記	ベルトルト・ブレヒト	谷川道子	栗山民也	05.11/28
	ガラスの動物園	テネシー・ウィリアムズ	小田島雄志	イリーナ・ブルック	06.2/9
	十二夜	ウィリアム・シェイクスピア	脚本 山崎清介 小田島雄志翻訳による	山崎清介	06.3/7
	シリーズ「われわれは、どこへいくのか」				
	①カエル★	過 士行	菱沼彬晃	鶴山 仁	06.4/1
	*②マテリアル・ママ★	岩松 了		岩松 了	06.4/19
	③やわらかい服を着て★	永井 愛		永井 愛	06.5/22
	④夢の痼★	井上ひさし		栗山民也	06.6/28
	ブロードウェイ・ミュージカル Into the Woods	作曲・作詞 スティーブン・ソンドハイム 台本 ジェイムズ・ラパイン	翻訳・訳詞 橋本邦彦	演出・振付 宮本亜門	06.5/19
2006/ 2007	アジアの女★	長塚圭史		長塚圭史	06.9/28
	「劇的な情念をめぐって」—世界の名作より—				
	シラノ・ド・ベルジュラック	原作 エドモン・ロスタン	翻訳 辰野 隆／ 鈴木信太郎	構成・演出 鈴木忠志	06.11/2
	イワーノフ／ オイディプス王	原作 アントン・チェーホフ 原作 ソフォクレス	翻訳 池田健太郎 日本語 福田恒存 ドイツ語 ヘルダーリン	構成・演出 鈴木忠志	06.11/4
	* エンジョイ★	岡田利規		岡田利規	06.12/7
	コペンハーゲン	マイケル・フレイン	平川大作	鶴山 仁	07.3/1
	CLEANSKINS／きれいな肌★	シャン・カーン	小田島恒志	栗山民也	07.4/18
	下周村 —花に嵐のたとえもあるさ—★	平田オリザ／李 六乙		李 六乙／平田オリザ	07.5/15
	夏の夜の夢	ウィリアム・シェイクスピア	松岡和子	ジョン・ケアード	07.5/31
	氷屋来たる	ユージン・オニール	沼澤洽治	栗山民也	07.6/18
2007/ 2008	「三つの悲劇」—ギリシャから				
	Vol.1 アルゴス坂の白い家★ —クリュタイメストラ—	川村 毅		鶴山 仁	07.9/20
	Vol.2 たとえば野に咲く花のように★ —アンドロマケ—	鄭 義信		鈴木裕美	07.10/17
	Vol.3 異人の唄★ —アンティゴネ—	土田世紀	脚色 鐘下辰男	鐘下辰男	07.11/14
	屋上庭園／動員挿話	岸田國士		宮田慶子〈屋上庭園〉 深津篤史〈動員挿話〉	08.2/26
	焼肉ドラゴン★	鄭 義信		梁 正雄／鄭 義信	08.4/17
	オットーと呼ばれる日本人	木下順二		鶴山 仁	08.5/27
	シリーズ・同時代				
	Vol.1 鳥瞰図 —ちようかんず—★	早船 聡		松本祐子	08.6/11
	Vol.2 混じりあうこと、消えること★	前田司郎		白井 晃	08.6/27
	Vol.3 まほろば★	蓬萊竜太		栗山民也	08.7/14

* =THE LOFT 公演

シーズン	演目	作	訳・脚色	演出	公演初日
2008/ 2009	近代能楽集『綾の鼓』『弱法師』	三島由紀夫		前田司郎(綾の鼓) 深津篤史(弱法師)	08.9/25
	山の巨人たち	ルイジ・ピランデルロ	翻訳 田之倉稔	ジョルジュ・ラヴォーダン	08.10/23
	舞台は夢 ―イリュージョン・コミック―	ビエール・コルネイユ	翻訳 伊藤 洋	鶴山 仁	08.12/3
	シリーズ・同時代【海外編】				
	Vol.1 昔の女	ローラント・シンメルプフェニヒ	翻訳 大塚 直	倉持 裕	09.3/12
	Vol.2 シュート・ザ・クロウ	オーウェン・マカファーティ	翻訳 浦辺千鶴／小田島恒志	田村孝裕	09.4/10
	Vol.3 タトゥー	デーア・ローアー	翻訳 三輪玲子	岡田利規	09.5/15
	夏の夜の夢	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 松岡和子	ジョン・ケアート	09.5/29
	現代能楽集 鶴*	坂手洋二		鶴山 仁	09.7/2
	ヘンリー六世	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 小田島雄志	鶴山 仁	
2009/ 2010	第一部 百年戦争				09.10/27
	第二部 敗北と混乱				09.10/28
	第三部 薔薇戦争				09.10/29
	象	別役 実		深津篤史	10.3/5
	東京裁判三部作	井上ひさし		栗山民也	
	夢の裂け目				10.4/4
	夢の泪				10.5/6
	夢の痂 かさよけ				10.6/3
	エネミイ*	蓬莱竜太		鈴木裕美	10.7/1
	【JAPAN MEETS… —現代劇の系譜をひもとく—】				
2010/ 2011	I ヘッダ・ガーブレル	ヘンリック・イブセン	翻訳 アンネ・ランデ・ペータス 長島 確	宮田慶子	10.9/17
	II やけたタン屋根の上の猫	テネシー・ウィリアムズ	翻訳 常田景子	松本祐子	10.11/9
	III わが町	ゾートン・ワイルダー	翻訳 水谷八也	宮田慶子	11.1/13
	IV ゴドーを待ちながら	サミュエル・ベケット	翻訳 岩切正一郎	森新太郎	11.4/15
	焼肉ドラゴン	鄭 義信	翻訳 川原賢柱	鄭 義信	11.2/7
	鳥瞰図 ―ちょうかんず―	早船 聡		松本祐子	11.5/10
	雨	井上ひさし		栗山民也	11.6/9
	おどくみ*	青木 豪		宮田慶子	11.6/27
	【美×劇】 ―滅びゆくものに託した美意識―				
2011/ 2012	I 朱雀家の滅亡	三島由紀夫		宮田慶子	11.9/20
	II イロアセル*	倉持 裕		鶴山 仁	11.10/18
	III 天守物語	泉 鏡花		白井 晃	11.11/5
	パーマ屋スマイル*	鄭 義信		鄭 義信	12.3/5
	まほろば	蓬莱竜太		栗山民也	12.4/2
	負傷者16人 ―SIXTEEN WOUNDED―	エリウム・クライエム	翻訳 常田景子	宮田慶子	12.4/23
	【JAPAN MEETS… —現代劇の系譜をひもとく—】				
	V サロメ	オスカー・ワイルド	翻訳 平野啓一郎	宮本亜門	12.5/31
	VI 温室	ハロルド・ピンター	翻訳 喜志哲雄	深津篤史	12.6/26
	リチャード三世	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 小田島雄志	鶴山 仁	12.10/3
2012/ 2013	【JAPAN MEETS… —現代劇の系譜をひもとく—】				
	VII るつぼ	アーサー・ミラー	翻訳 水谷八也	宮田慶子	12.10/29
	音のいない世界で*	長塚圭史	振付 近藤良平	長塚圭史	12.12/23
	長い墓標の列	福田善之		宮田慶子	13.3/7
	With ―つながる演劇―				
	ウェルズ編『効率学のスズメ』*	アラン・ハリス	翻訳 長島 確	ジョン・E・マグラー	13.4/9
	韓国編 アジア温泉*	鄭 義信	翻訳 朴 賢淑	孫 振策	13.5/10
	ドイツ編 つく、きえる*	ローラント・シンメルプフェニヒ	翻訳 大塚 直	宮田慶子	13.6/4
	象	別役 実		深津篤史	13.7/2